

## FL-net Ver.3.0公開用ソースコードの補足情報

No.	ソース	行数	補足説明
1	common.h	46	#define VER_200は、Ver.2.00で有効という意味。 Ver.3.00以降でも有効とする必要があります
2	Prtcl.c	3620	コメントに/* Addres Double Detect */とあるが、本処理はアドレス重複が無かった場合に呼び出されるため、/*Addres Double No Detect */が正しい。 アドレス重複を検知しなかった場合、ログデータの加入回数をインクリメントする
3	Prtcl.c	3631	SelfNodeTbl->Sts_LKS &= (~FALINK_MEMORY_SETCOMPLETE); /*コモンメモリ設定完了*/ とあるが、正しくは SelfNodeTbl->Sts_LKS &= (~FALINK_MEMORY_SETCOMPLETE); /*コモンメモリ設定完了解除 */ である
4	deviceLvNet.h	64 65 66 67 68	JEM-1479 図144-自ノード状態とサンプルソースの関連は、以下の通り トークン監視時間エラー : #define OWNSTS_TOKENHOLD_TIME (0x08) コモンメモリ範囲エラー : #define OWNSTS_MEMORY_RANGE (0x10) フレーム待ち状態 : #define OWNSTS_WAIT_FLAME (0x20) 自ノード番号重複 : #define OWNSTS_NODE_DOUBLE (0x40) 自ノード設定完了 : #define OWNSTS_ENTRY (0x80)
5	Prtcl.c	3034 3035	他ノード宛てのトークン受信の際は、参加ノード管理テーブルの登録を行わない。 以下2行は、他のTOKEN_TO_OTHERと同様に以下の処理を無効化する regist_sanka_tbl(headerp); adr_tyousoku_pro(headerp); ↓ #ifndef VER_200 regist_sanka_tbl(headerp); adr_tyousoku_pro(headerp); #endif
6	Prtcl.c	5799	* \$機能\$ 直前のトークンの発信ノードから現在受信したトークンの発信元 → * \$機能\$ 前回受信したトークンの発信元ノードから現在受信したトークンの発信元ノード… 前回受信した発信元ノード～今回受信した発信元ノードまでの間で、トークン発信のなかったノードを検索し、3回以上未受信で離脱とする処理。 各ノードは、トークンを受信したタイミングで、該当のノードを有効にするフラグを ON(TokenFaultCount[i].flag=1)し、それがONの間は監視を続ける。
7	Sock_if.c	181 169 なし	ソケットの送信に関するログは、以下のタイミングでインクリメントします 「通算ソケット部送信回数」 : SOCKETでの送信(Sendto)の結果が正常時に+1 「通算ソケット部送信エラー回数」 : SOCKETでの送信(Sendto)の結果が異常時に+1 「イーサネット送信エラー回数」 : 未カウント。
8	fa_log.h	112	自己離脱回数は、サンプルソース上では、カウントしていないが、自ノードがトークン保持時間内に送信完了できない事が、3回連続で発生した場合に自己離脱としてカウントアップするログである。 例えば、サンプルソースで、Prtcl.cのS42_TE5関数でトークン保持時間内の送信を監視しており、このタイムアップ時にカウントすることが1つの手段になる。